

熊野古道中辺路を往く

宇敷 辰男

新型コロナウイルス感染拡大第五波と第六波の合間に和歌山県を訪ねて来た。和歌山は熊野三千六百峰といわれる紀伊山地の山々が沿岸から幾重にもつらなり、遠く霞みゆく山あいを京の都から上皇や歌人も旅した神仏の聖地をつなぐ熊野古道が巡っている。その一つに紀伊田辺から熊野速玉大社へ至る中辺路（なかへち）がある。すれ違う人も少ないその道を二日に渡って少しだけ、マスクを仕舞って歩いてみた。

その一日は杉と檜に囲まれた参詣道を一步一步踏み締めながら、土と砂利を山から切り出した丸太で固めた山道を歩いた。道端では魔除けの赤いヨダレカケをした旅守り道守りのお地藏さまが旅人巡礼者を見守っている。江戸時代の石畳の下り坂の土手には、正月飾りの縁起物ウラジロが斜面一杯に広がって生えていた。苔とシダに囲まれた山道にはヒノキが立ち並んでいる。柔らかい浮いた木肌を剥がされ、檜皮を採取された裸の幹は寒そうだ。森を抜け熊野本宮大社に着くと檜皮葺の重厚で荘厳な社殿がそびえ立っていた。

もう一日は竹の杖を借りて杉並木の古木に囲まれた大門坂を歩いた。平安時代に作られ江戸時代に切り出した大小の石を敷きつめた石畳の参詣道だ。二六七段の奥行の長い段差の低い石段をのぼり切ると熊野那智大社に着く。クスの大木に見守られた境内から、原生林に囲まれた岩壁の上から流れ出る白い三筋の滝口が見えた。鎌倉時代の石積み階段を降りて更に石段を下っていくと滝音が響きわたって来た。その先の苔むす石段を上って見上げると、落差一三三呎の那智の滝が白い飛沫を広げて断崖を叩きつけ流れ落ちていた。

熊野灘の大海原からも見えるという我国最大の滝を経て、熊野灘を望む海岸沿いの高台を越えていくと、鮮やかな朱色の社殿がそびえる熊野速玉大社に辿り着く。

古代から続く熊野三山をめぐるその道は、平安時代から戦国の世を乗り越えて、江戸時代から現代へと、時代を超えて今につながる古道であった。